

思春期集団プログラムの試み

～ライフスキルトレーニングの今後の展望について～

○藤井 友香¹⁾ 小寺 勇人¹⁾ 國井 陽介²⁾ 菅原 智子³⁾

1) 作業療法士 2) 臨床心理士 3) 心理士

札幌太田病院 作業療法・音楽療法課

【はじめに】

自閉症スペクトラム障害（以下 ASD）を主とした思春期患者に対し、社会性・コミュニケーション力を培うことを目標に小集団でのソーシャルスキルトレーニング（以下 SST）を試みてきた。現在は、ライフスキルトレーニング（以下 LST）が有効ではないかと考え、活動を継続している。ライフスキルとは、ソーシャルスキルを含めた「生きていくために必要なスキル」全般を指す広い概念である。今回、一連の思春期プログラムの試みを振り返り、その意義と今後の展望について考えていることを報告する。

【方法】

対象は衝動性が高い、周りとの調和が取りにくい、自発性が低い等の発達的特性を持つ ASD 患者が中心で、各回 2～6 名の参加である。心理士・作業療法士が担当し、2016 年 12 月から 1 年間は SST、2018 年 1 月から現在は LST を週 1 回 1 時間のプログラムで実施している。

SST：相談の仕方、断り方、面接の仕方、表情から感情を読み取ること等をテーマとして設定し、技能ステップを提示したうえでロールプレイを行う。

LST：自発的な発言や参加者同士の相互交流を促すこと、楽しみを共有できる場となること等を意識して、様々な活動を行う。現在までに体育館での卓球やジェンガ・トランプ等の卓上ゲーム、コラージュ療法、伝達語・伝達記号ゲーム等を試みてきた。

【経過及び結果】

SST 参加者からは、「楽しかった」「勉強になった」等の感想が多く得られていた。また、衝動を抑えて最後まで参加できるようになった、会の中では自発的に発言することが増えた等、継続による効果を感じる面もあった。しかし、流動的な参加者に対応したテーマの選定が困難であり、日常生活への般化についての評価はできなかった。LST においても、「難しかったけれど楽しかった」等と、様々な活動に挑戦しながら楽しんでいる様子が伺えるものの、適切なアセスメント・効果測定は確立できていない。

【考察・今後の展望】

ASD 患者は気持ちの読み取りや非言語的コミュニケーションを苦手としやすく、また、SST の効果が出にくいといわれている。しかし、SST の活動を振り返ると安心して楽しみながら学びを共有できる場にはなっていたと感じられた。現在の LST では、活動を通して楽しみながら様々な形の他者交流ができる場となっており、苦手・得意双方のスキルに働きかけられると推察する。今後はアセスメントや効果測定システムを確立させ、より有意義なプログラムとなるよう努めていきたい。

【参考】

小貫 悟 LD・ADHD・高次脳機能自閉症へのライフスキルトレーニング. 2009

梅永 雄二 15 歳までに始めたい！発達障害の子のライフスキルトレーニング. 2015